

小学校音楽科の授業づくりのための研修講座の成果と課題

科学技術教育部 研究主事兼指導主事 福本 浩介



要約

京都府総合教育センターが実施している、小学校「授業づくり」講座及び京都府小学校教育研究会研究協力校と京都府総合教育センターとの共同研究等、授業実践を伴う教員研修や支援から、教員育成の視点で小学校の音楽科教育に関する実情と課題を考察した。

キーワード：小学校音楽科授業づくり講座、授業研究、若手教員、oppシート

1 はじめに

小学校における新教育課程の全面実施から3年が経過し、先行実施から数えると5年経過したことになる。大量退職・大量採用による若手教員育成、学力向上やいじめ問題の根絶等々が喫緊の課題として叫ばれ続けている。児童にとって学校は、みんなで力を合わせて勉強し、先生を好きになり、教科の面白さや良さに気付き教科を好きになり、お互いを高め合える場所であってはならない。

科学技術教育部の所掌事項として担当してきた小学校「授業づくり」講座や京都府小学校教育研究会（以下、府小研）研究協力校と京都府総合教育センター（以下、センター）との共同研究における研究サポートなど、授業実践を伴う研修・支援の立場から、教員育成や学習環境構築についての現状と課題について考察する。

2 学校文化の基盤としての授業力

(1) 教師は授業で勝負する

将来の職業や生活を見通して、社会において自立的に生きるために必要とされる力が「生きる力」である。「これからの学校は、進学や就職について

子どもたちの希望を成就させるだけではない」と、中教審答申（H20.1.17）で示された。

教科は異なるが、TIMSS2011、PISA2012のいずれのデータからも、我が国の子どもたちの学力の高さに反して、学習に対する社会的な意義や価値付けの低さが見える。対象各国の中で最下位を争う低さである。「主体的に学習に取り組む態度」が日本の子ども達の最大の弱みである。

児童の人格の完成（教基法第1条：教育の目的）を目指し、「児童の心に火をつける」ことが教師の仕事である。「生きる力」の育成を目指し、子どもたちが学びの本質に迫ることも、児童・教師の自尊感情を醸成することも、校長を中心に一枚岩となって困難校を立て直すことも、基盤にしっかりした授業があつてのはなしである。「社会総がかりで取り組む教育」や「学校を中心とした地域コミュニティの構築」も教師が児童の学習意欲を喚起させ、確かな学力を身に付けさせる授業を展開することが大前提である。

(2) 音楽科の現状①

平成 23 年度のセンター研究紀要から小学校『授業づくり』講座についての記述を振り返ると、『「得意」「好き」と感じて熱心に実践研究に励み、学校や地域のけん引役として活躍する教員がいる一方で、これらの教科を年間の重点研究教科として定める小学校は多くない。また、教師自身が「教科のよさを生かし切れない」「実技・実習が不得手なのでとりつきにくい」といったことから、他教科と比較して敬遠しやすい傾向は否めない。教科の魅力や学習の価値を高めて児童に学ぶ喜びを示し、確かな学力を定着させるという教師の使命が十分に果たされなければ大変なことである。』としている。その後の 2 年で音楽科の指導を重点課題とする小学校が激増したということはない。しかし、指導と評価の一体化やその検証等は依然として全国的な課題であり、指導のねらいと手立てを明確にした学習の全体構成の見直しや評価の工夫による優れた実践を波及することが大切である。

(3) 音楽科の現状②

「ネタ 7 分に腕 3 分」（京都大学大学院 田中耕治教授：H23 授業づくり講座より）とは、ある有名な寿司職人の言葉である。よい素材を見分け、最適な環境で客に振る舞えることはプロの条件である。プロとして、お客さんに素材のよさをアピールする能力は、さしずめ学習の必然性、有用性を高める魅力的な題材の構想力と、児童の現状を把握した指導の適時性の判断力や音楽室経営・児童の管理も含めた、場の構成力などであろうか。教師は、児童が主体的に学習に取り組む態度を養い、

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力やその他の能力を育まねばならないのだが、実際には「音楽はよく分からないので」「発表会までに間に合わせなくては」「指導で優先すべき教科がある」等々が現実的な学校現場の声である。教科書の教師用指導書をバイブルとし、表記通りの展開に努めるが児童の知覚・感受の認知や深化に迫れない「聴いてどう感じましたか？」の授業や、児童の思いや意図・試行錯誤による音楽表現の創意工夫の観点を欠く教師主導の「技能向上」授業などは従前の課題の代表格である。前述の寿司職人ではないが、一定以上の力量と心意気を備えた専門家であることの誇りと自覚を欠くことは許されない。しかし現実には「音楽は、まあ、…」の方が一般的なのである。

(4) つながる力 — 優れた実践

児童の学びの世界を拓き深めるための動機付けが授業である。日々の児童のモチベーションの維持もまた、授業によるところが大きい。

授業力の向上を組織的に図り、教師力を向上させる。そのことが学校のよりよい教育環境の構築につながり、児童の質の高い学力を育み、ひいては保護者や地域から高い信頼と支援を得ることにつながる。教師としての誇りやさらなる資質向上への意欲の醸成につながる。こうしたサイクルの確立と発展が学校改善のセオリーである。

授業研究における学習指導要領の趣旨に即した題材構想・評価計画に基づく優れた実践例として、センターと府小研との共同研究校であった京丹波町



図1 H25全国学力学習状況調査より

立竹野小学校や与謝野町立加悦小学校における音楽科教育実践研究の展開は顕著である。音楽科の実践研究の取組を契機に、職員一丸となり自校の強みを伸ばしつつ児童・保護者・地域・町教育委員会等を巻き込みながら全校的な教育環境を整備した。よりよい学びのための好循環の構築過程は決して奇をてらった特別なものではなかったが、学校が関係者となつながら、包み込まれながらよりよい姿に変容していく極めて価値のある事例である。まさに、「教育に携わるもの」「教育を受けるもの」「国民一人一人」の意識改革が相まってこそ実現する実効ある教育改革の地域版である。

授業力の向上を基盤とした実践こそが学校改善を推進する。府小研とセンターとの共同研究は、理科、音楽科、図画工作科、体育科、家庭科の研究協力校と科学技術教育部の間で実施している。



3 支援の見通し

(1) よい授業の Check と Action に先立って

上記「図1」は、質問事項のそれぞれ上2段が児童・生徒、下2段が教師に対するものである。教師が「もちろんやっている」と思い込んでいることが、実はそれほど子ども達に伝わっていないことを示している。

よい授業の定義のひとつとして「教室の犀」で Raymond Murray Schafer は「印象に残る授業」を挙げている。しみこみ型・積み上げ型いずれにしても「これか！」と学習者に価値を感じさせなければ、易々とは印象に残らない。「共感・共有」「異なった考え方への理解・気付き」「価値把握」など学校でみんなて学ぶことの強みを生かす工夫の検証が常に必要である。

(2) 教えと学びの羅針盤としての学習評価

評価のあり方について講座で触れる場合「ねらい＝児童に付けたい力＝題材の評価規準 ← 指導内容と評価計画との整合性」というところに向けて、学力の重要な3つの要素（学教法30条第2項）と音楽科の各観点の評価の趣旨との相関関係の整理から入ることが多い。そして、大抵はまずここで停滞

する。これは、中学校音楽科教諭の部会でも例外ではなく、単に教科の専門性の差ではない。問題は、受講者が3つの要素と評価の観点の関係性を意識したことが無いことにある。さらにいえば、そもそも学力の3つの要素そのものの説明から必要なのである。

教育評価は、「教え」と「学び」の接点に働く「羅針盤」（京都大学大学院 田中耕治教授）である。「信頼性と妥当性、児童に対する有用性」三拍子そろってこそ、学習評価である。



(3) 指導の要

今回の学習指導要領改訂で示された音楽科の〔共通事項〕は、児童が思いや意図をもって表現や鑑賞の活動をするための窓口で、学習活動の支えとする世界共通の音楽的な概念である。つまり、〔共通事項〕の位置づけに対する教師の認識は、児童の将来にわたる音楽活動の根幹に関わるのである。

〔共通事項〕に係る教材間の連関性や系統性、6年間の指導を見通した展望というように関連づけてバランスよく構成したり、全体をうまく接続するために見直すなど、実際の指導に生かせる手立てや実行できる実践を追求することが大切である。学びの好循環への重要な一歩だととらえたい。

学校教育に対する社会の信頼と、質の高い学習との相関関係はいうまでもない。手立てが目標にすり替わる現象（前述「音楽科の現状」）による様々な弊害による学習の質の低下を招かぬために、「音楽活動を通して児童が学習の価値を共感することを積み重ねながら児童の豊かな人間性を育成する」という原点に立ち返り、教育課程を編成し実践する必要がある。

音楽科の目標は「音楽を愛好する心情」、「音楽に対する感性」、「音楽活動の基礎的な能力」の三つを関連させて、全ての過程において児童の情意面と能力面とをかかわらせながら「豊かな情操を養う」としている。児童の豊かな情操を養うことが、一人一人の豊かな心を育てるという重要な意味をもっている（小学校学習指導要領解説 音楽編）ことについての十分な理解があればこそ、効果的な指導についての見通しをもつことができる。



(4) 教師力の育成

ベテラン教師が少なくなる中、若手教師が「自信がない」といっている教科の上位に音楽科が位置しているが、さらに実は「自信がないのは若手に限らない」という差し迫った状況がある。ある教育局では教員の要望に応え、管内の2～6年目の教員を集めて授業研究に取り組ませている。施策の充実による組織的かつ迅速な対応が必要である。

教師の、教科指導に関わる「そもそも（基礎的基本的）」な部分を丁寧に押さえ、「そもそも」な部分を活用して課題を解決している優れた実践例から学ぶ力と、心を一つにして課題を解決し学校改善へと進んで取り組む能力の育成を喫緊の課題と捉えて、その支援に努める必要があると認識する。

目の前の児童に対する手立てと検証を計画的・系統的に講ずるための、教員の互恵的で協同的な研修を丁寧に支えれば、世界的にも優秀な我が国の教員は必要な内容を十分に実践し、効果的な活用を編み出すことは間違いない。



4 「授業づくり」シリーズ講座の概要

実技・実習を伴う教科の指導は、その学習活動が児童の体験を伴い、発見や喜び、感動や達成感等の共感を積み重ねて実生活へと接続することから、児童の実体験の機会の充実や互惠的協同的な課題解決能力の向上といった今日的な学習に応えるものである。効果的な教育活動を通して児童の自尊感情を醸成し、さらなる学習意欲の向上へとつながる全校的な学びの好循環を構築し、児童に質の高い学力を育むことが大切である。

本講座では、児童が主体的に学ぶ授業を追究し、授業改善の推進と教科指導力の向上のための校内研修支援とともに、地域の教科リーダーとして活躍する人材育成及びネットワーク構築による活用を目指している。

(1) 講座のめあて

① Check & Action 改善・管理のための「振り返り」の機会

日々の授業の振り返りの機会として、優れた授業実践のエッセンスや授業改善のヒントを習得し、シリーズ受講者の実践研究と出前講座等との有機的な接続による校内研修の充実を図る。

② Plan & Do 児童の「質の高い学力」を育む授業づくりの波及

著名な講師を招き、教科における最先端の知識を習得する。評価方法の工夫改善、言語活動・グループ活動の適切なコーディネートと併せ、One Page Portfolio Assessment シート（以下、OPP シート：山梨大学 堀哲夫教授）の効果的な活用による児童の思考力、判断力、表現力の育成・評価について学ぶ。（文末に児童の記載例を添付）

児童の「聴き取り、感じ取った」内容、「思いや意図」「思考判断の過程や結果」などについて児童自身による気づきや振り返りの学習の質を高め、教師がそれを丁寧に把握し活用する手立てを学ぶ。

OPP シートの活用は効果的であるが、作成には児童の現状把握と適切な題材構想による評価の焦点化など、指導と評価の見通しの明確化が絶対条件である。

③ 教科リーダーの育成

地域の教科リーダーとして京都府の目指す「質の高い学力」の育成に資する人材を育成する。過年度のシリーズ受講者は校内の研究推進の柱や当センター講座をはじめとする研修講座の講師、府小研の専門研究員等として活躍している。

(2) 講座の構成と受講者の感想（一般受講者を含む）

児童が「学ぶこと」への意欲を高め、「質の高い学力」を培うための題材構想計画の改善を図り、児童が学び手として育つ授業実践を受講者自身が企画する。

シリーズⅠ

「本質的な学びを追究する授業の在り方」 京都大学大学院 石井英真准教授 今求められている学力観や指導と評価の一体化を意識した授業改善
「児童の学びと授業づくり」 H23年度シリーズ受講者 長尾朋美教諭 音楽科に求められる学力観を焦点化して指導に生かす視点 実践上の課題
○ 「構成主義の学習観」「児童のつまずきを捉える」という切り口から、授業づくりの基本、授業の条件、評価に

ついて学んだ。児童の思考の過程を大切にした授業構想の視点から、学びの本質を追究するという講座の内容を実践に生かしたい。

- 「児童が音楽活動を楽しんでいるのか。音楽を味わっているのか。」という問いの前にある、そのための学習環境構築の力量が大きく影響することを改めて認識した。
- 学習指導要領の趣旨に則した評価のポイントや、児童が自らの音楽的変容を意識して捉えることのできる音楽活動について、実践事例を通して学んだ。題材構想や環境構築の方策、言語活動の捉えやコーディネートについて、認識を深める機会になった。
- 実践発表からは、音楽科としての全校的な環境構築や授業の在り方について学ぶことができた。音楽科の取組を地域とのつながりへと接続した内容で、今後の展望につながった。

シリーズⅡ

「つながる力・音楽する力
～脳の機能から観た視点～」

当センター人材育成支援 後野文雄チーフアドバイザー
知覚・感受し互いに共感できる学習活動を支える視点

「児童の豊かな情操の育成をめざす授業づくりの工夫」

兵庫教育大学 河邊昭子准教授

学習指導要領の趣旨に則した指導と評価のポイント及び実践事例

児童の豊かな情操を育む音楽活動

- 音楽活動と児童の発達との関係について、自分が今まで感覚的に捉えていた内容の裏付けとなり、疑問の解消や納得につながった。
- 題材指導計画の具体的な検証は、実践意欲の醸成につながった。
- 目先の授業展開や評価の課題等にと

らわれて、本来の魅力的な音楽活動について指導の見通しを見失いかけていた。学習の基盤となる環境構築や児童の把握の在り方について、振り返るよい機会になった。

- 児童の技能面の育成と心情面の育成との、両者を効果的にかかわらせた具体的な実践例について、学んだ内容を学校で伝えたい。

シリーズⅢ

「題材構想の検討・精査」

- シリーズⅡ講座で解決できなかった事項や工夫について協議し、じっくりと時間をかけて学ぶことができた。
- 児童の「思考力・判断力・表現力」を育て「変容」を捉えるための仕掛けについて、具体的な方策を練ることができた。
- 「知覚・感受」を基盤とした、音楽科における児童の思考力・判断力・表現力の育成について、学んだことを広めたい。

シリーズⅣ

「実践発表」「研究協議」

- シリーズ受講者の実践発表と自らの実践を重ね合わせて、実践上の新たな課題やヒントに気付くことができた。
- シリーズ受講者の実践発表や公開授業から、〔共通事項〕を要に題材を貫いて活動領域や教材間を効果的に接続することの重要性を再認識し、学んだことを実践したい。
- 音楽科の学習を児童の実生活及び生涯にどうつなげていくのかについて、音楽科の目標と「豊かな人間性の育成」との関係から理解した。
- 小学校籍の（専科でない）教諭による優れた実践に素直に驚き、刺激を受けた。小学校での優れた実践から学んだことを、校区の小学校に伝えたい。

(3) 平成25年度の改善点

平成24年度まで本講座で実施していたシリーズ受講者の代表による該当校での公開授業の併設を廃止し、シリーズ受講者の実践発表のみとした。

講座案内の別途連絡に係る、関係機関を含めた事務的な負担軽減となった。

シリーズ受講者に関わって、具体的に以下の内容を改訂した。

府内の各教育局から推薦されたシリーズ受講者は全員、所属校において本講座で計画した研究実践に伴う研究授業及び校内研修会を実施する。5名のシリーズ受講者が相互に各校の研究授業・校内研修会にセンター担当者とともにオブザーバーとして参加する。尚、最大4回の旅費の内、2回まではセンターが負担する。

各校の年間研修計画決定後にシリーズ受講者が決定されるため、本講座の校内研修会は該当校の校長及びシリーズ受講者の深い理解と協力なしには成立しない。シリーズ受講者は、校内でも多様な分掌を担っており日程調整は容易ではない。今回は事前にシリーズ受講者内で、少なくともセンターが旅費を負担する2回分の校内研修への参加や、5名のシリーズ受講者の公開授業に対するできるだけ均等な参加体制の確保など、配慮できる範囲で調整するなどの工夫があった。

平成25年度音楽科シリーズ受講者該当校

長岡京市立長岡第五小学校
京田辺市立松井ヶ丘小学校
亀岡市立大井小学校
舞鶴市立新舞鶴小学校
宮津市立宮津小学校

(4) 「授業づくり」講座の成果と課題

ア 成果

- ① 受講者が教科教育に関する最新の情報から学ぶとともに、「学習指導要領解説」や「評価方法の工夫改善のための参考資料」「OPPシート」等と向き合い、実践につながった。
- ② 自らも演奏団体に所属して日常的に音楽活動を楽しんだり、教材の深い分析（合唱曲の和声進行解析による表現の工夫）や研究（受講者自身の生演奏による鑑賞指導）に取り組むなど、高い専門性を持つシリーズ受講者同士の互恵的な研究による相乗効果により、講座の質が向上した。研究協議における題材構想に対するひたむきな検証は、受講者が相互に深め合う時間の共有と満足感につながった。
- ③ 5名のシリーズ受講者の在籍校を対象とした校内研修（授業研究）への支援と講座担当者・シリーズ受講者相互の参加は本講座の性格を決定付けるものであり、それぞれにとって有意義であった。
- ④ シリーズ受講者の該当校での公開授業・校内研修について、出前講座と併せて有効な活用ができ、職員の授業改善に向けた意識変革の契機となった。参加した職員は、音楽科の研修を受ける機会が多くないため大変有意義だったと回答している。また、シリーズ受講者がオブザーバーとして他校の研修に参加することで互いに刺激になり、効果的な学びにつながった。
- ⑤ シリーズ受講者が教科教育に関する研修等により、教科リーダーとして各地域で講座で学んだ内容を発信し波及することは、教科に対する不安感や苦手意識を抱える若手教員育成に効果的である。また、シリーズ受講者間のネ

ットワークを生かすことで、研究実践の継続的な交流や活性化を推進することができる。

イ 課題

- ① 9月～11月の3ヶ月の間にシリーズ受講者の公開授業・事後研究会を1回新たに加えることや、シリーズ受講者相互に参観することについて、該当校でかなり大きな労力を割いて頂かねばならない。講座の質のさらなる向上と、校内研修と出前講座と絡めた魅力的な提案等を図り、本講座の満足度や有効感を高める工夫が必要である。
- ② 本講座について、授業づくりや授業改善に有効であることの啓発が必要である。一般受講者参加の最大枠は、シリーズ受講者5名をホスト役に協議を深める場合1講座あたり15名程度が望ましい。
- ③ 本講座で学習指導上の本質的な内容等について教授法の基盤となる部分を取り上げて丁寧に振り返った。その内容をシリーズ受講者が改めて波及し、本講座のねらいを具現化していくことが重要である。

5 おわりに

音を媒体としたコミュニケーション活動を通して児童の豊かな情操を育むことが音楽科のねらいである。児童の学習に対するレリバンズ※1と学習態度の密接な関係において、教師の力量が試されている。「児童の心に火をつける」職責を担う教師の心に火をつけるものは何か。大部分は教師自身の情熱や使命感と校長を中心とした緻密な運営とにかかっているが、そこにセンターの支援どころもある。

児童の情操は数値化できず、重点研究になりにくいこともまた、音楽科に対す

る教員の苦手意識に拍車をかけている。

題材終了後の児童のあるべき姿や毎時のゴールイメージが不明確で、なんとか指導書に沿って教科書をこなしている若手教員を、数年の間に京都府の教育を牽引する側の教員に育てなくてはならない。授業実践力は教師の命であり学校活性化の原動力である。児童の豊かな情操を養う教職員・学校への支援に邁進し、中核教員の養成により京都府の教育の活性化を図りたい。



※1 ここでのレリバンズは、児童の学習に対する社会的な意義や価値付けを意味する。

夏の日の贈り物の

6年 組 ()

☆ 曲想に合った歌い方の工夫を考えよう！

楽ふのこの部分を RDC このように歌いたい

歌詞	なつのはーことはだどりー のところが	なつのはーことはだどりー のところが	なつのはーことはだどりー のところが	なつのはーことはだどりー のところが
強弱	「かいらもじー」のところ ← (フレジエント)	「かいらもじー」のところ ← (フレジエント)	「かいらもじー」のところ ← (フレジエント)	「かいらもじー」のところ ← (フレジエント)
旋律の動き	ひとは、まちはにもどり ひとは、まちはにもどり	ひとは、まちはにもどり ひとは、まちはにもどり	ひとは、まちはにもどり ひとは、まちはにもどり	ひとは、まちはにもどり ひとは、まちはにもどり
曲のつくり	合唱 → (後) Xロゾー はつかけ	合唱 → (後) Xロゾー はつかけ	合唱 → (後) Xロゾー はつかけ	合唱 → (後) Xロゾー はつかけ
歌詞	うつくしいなつのはよー のところが	うつくしいなつのはよー のところが	うつくしいなつのはよー のところが	うつくしいなつのはよー のところが
強弱	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ
旋律の動き	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ	やまはーそびえ ずフォルテ
曲のつくり	よひのかけ合い ↓ 2部合唱	よひのかけ合い ↓ 2部合唱	よひのかけ合い ↓ 2部合唱	よひのかけ合い ↓ 2部合唱

大切はところをよく見ぬが、考えられれば、

夏の日の贈り物の


6年 組 ()

☆ 曲想に合った歌い方の工夫を考えよう！

楽ふのこの部分を RDC このように歌いたい

歌詞	やまはあきのいろよ 歌い方で歌いたい。	やまはあきのいろよ 歌い方で歌いたい。	やまはあきのいろよ 歌い方で歌いたい。	やまはあきのいろよ 歌い方で歌いたい。
強弱	もえかけた が(らもじ)	もえかけた が(らもじ)	もえかけた が(らもじ)	もえかけた が(らもじ)
旋律の動き	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー
曲のつくり	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー	なつのはーみちよ (低音) Xロゾー
歌詞	うつくしいなつのはよ 一番の盛り上がりなところ	うつくしいなつのはよ 一番の盛り上がりなところ	うつくしいなつのはよ 一番の盛り上がりなところ	うつくしいなつのはよ 一番の盛り上がりなところ
強弱	太陽が(ぼんた)	太陽が(ぼんた)	太陽が(ぼんた)	太陽が(ぼんた)
旋律の動き	やまのおくりもの やまのぶくりもの	やまのおくりもの やまのぶくりもの	やまのおくりもの やまのぶくりもの	やまのおくりもの やまのぶくりもの
曲のつくり	やまの～なつのはよ 盛り上げるように歌う	やまの～なつのはよ 盛り上げるように歌う	やまの～なつのはよ 盛り上げるように歌う	やまの～なつのはよ 盛り上げるように歌う

大切なところを止まり、しっかりと考えられています。 七休も、エス下り。


① 

【学習課題】
(全員学習)
どのように歌えば、前半と後半の曲想のちがいを表現できるだろうか。

【自分のめあて】
曲のつくりをどのように歌えばいいかが分からなかったため、みんなのアドバイスを聞いて、自分なりに歌う。

【ふり返り】
全員学習をして、表現の仕方を共通理解し、学級で2部合唱をしました。今日の学習をふり返って感じたことや考えたことを書きましょう。


全員学習をして、3はくのばしたら、声を小さくするなど、糸細いところまで深められたので良かったです。今日は、そこを気をつけただけど、うまくいかなかった。なので今度はうまくいくようにしたいです。



いよいよ本番！！


10月26日(土) 校内音楽会

10月31日(木) 鶴岡市小学生合唱音楽会




♪合唱の積み重ね♪

夏の日の贈りもの



ひびけ！ 歌声！！

6年 組 ()

① 


【学習課題】
(パート練習)
音程やのびた音、休ぶに気を付けて、自分のパートを歌おう。

【自分のめあて】
パート練習をしたり、みんなと歌ったりして、みんなの良い所を見つける。

【ふり返り】
自分のパートで、好きな部分はどこですか。また、好きな歌詞はどこですか。その部分をどのように歌いたいですか。

ぼくのパートで、好きな歌詞の部分は「やまは」の部分です。理由は高音だけで歌う所なので、びくびく気持ちがいいからです。今日は、口が大きくあけられなかったため、今度から、気を付けたいです。

「山はーッ」部分は、曲の山へ向かう感じが、どうですか。今日は、口を大きく開けて、口を大きく開けると、高音が（おもしろい）です。

② 


【学習課題】
(全員学習・パート練習)
曲全体がどのようなつくりになっているかを確かめ、自分のパートの歌い方を考えよう。

【自分のめあて】
歌、たとえ意見を出し合いアドバイスを取り入れて学習を深める。

【ふり返り】
曲全体のつくりから、自分のパートで気を付けて歌いたいところを書きましょう。

ぼくは「美しい」の部分で、だしを気を付けたいてす。理由は、一番盛り上がる所なので、はらはらとしたときなくなるからです。今日は、口を大きく開けていたけど、周りの人に大きく開けてないと言われたので、周りから大きく口を開けるように見えるようにしたいです。

その日は学習にはなりましたが、友達からのアドバイスのおかげで、自分も上手に歌うことができました。

③ 

【学習課題】
(一人学習)
どのように歌えば、前半と後半の曲想のちがいを表現できるだろうか。

【自分のめあて】
前半と後半の曲想のちがいをを見つける。

【ふり返り】
一人学習をして、考えたこと、難しかったことを書き、次の全員学習につなげましょう。

旋律の動きが、真似かたです。でも、一人学習をすると、なんとなく分かったので、歌うときに気を付けたいです。なせ、1つの曲に、合唱とか2部合唱があるのかなと思いましたが、音楽でも、おたすけを考えた。面白い、楽しそうに見えています。

それを考えることが、曲の山を盛り上げるのにつながります。おもしろい気持ちです。曲想のちがいを表現し、すは合唱に